

水の女





水の女

一九七九年三月二〇日第一刷印刷
一九七九年三月二五日第一刷発行

定価九八〇円

著者 中上健次

発行者 寺田博

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒103 電話(〇三)二六二丁九七五三
振替口座 (東京) 六一二七一八三

印刷・製本 図書印刷

(落・乱丁本はお取替え致します)

目次

| | | | | |
|-----|-------|------|-----|----|
| 鬼 | 鷹を飼う家 | かげろう | 水の女 | 赫髪 |
| — | — | — | — | — |
| 161 | 105 | 75 | 41 | 7 |

装丁
菊地信義

画
麻田
浩

水
の
女

赫

髮

髪 赫

女の髪は緋色でも金髪でもなかった。その髪は色艶が悪く髪そのものが人工のものに見える。その赤みがかつた黄色の髪は肌理の荒い肌の女によく似合った。色は白かった。だが元々色が白いのではなく、むかし日に焼けて黒かったのがいまは日に当る事などないために白く変色した、そうみえた。赤い髪の女はその髪をふり立てるようにゆっくりと口を動かして、飯を食った。シュミーズの下に何も着けていないために、もそもそと口を動かす度に体全体が動き、黒い乳首がシュミーズに映った。女は食っていた飯を呑み込んでからや々と気づいたのか「なにい？」と顔をあげて光造を見た。

蒲団の中に腹這いになったままの光造の眼をのぞき込むように見て、「これかん？」と、シュミーズをたくし上げ笑をうかべた。女の女陰はなの黒い剛い毛が見えた。女陰はなのにおいがまだ鼻先にまつわりついている気がした。

女は食っていた茶碗と箸を持って立ちあがり、音させてそれを流しに置いて水道の蛇口をひねった。流れ出た水の音で外に降っている雨の音がかき消された。

光造の蒲団に女はもぐりこみ、

「ちょっとうちも入れて」

女のひじが光造の脇腹に当たった。

「なんやしらん寒い」

女はそう言つて光造の裸の胸を冷たい腕で抱いた。女が光造を足で抱える。光造の下腹に押し当てられた女のシュミーズが部屋の中の空気ですべて冷えていてつめたい。人形の髪のような染めた赤い髪が光造の目のすぐそばにあった。女の肌の温りはすぐ伝わる。

光造は女が押し当てた腹が呼吸と共に動くのを知り、体の向きを変え指を後からすべり込み、世女の女陰に当たった。女は腰を持ちあげる。それ以上するつもりはなかった。女が部屋に転がり込んで三日間あきもせず繰り返す女と交接したので、恥骨が甘く痛んだ。女の体に何度も打ちつけたために陰囊もとまどつたようにけだるかった。

女には駅一つ向こうの、丁度山を切り開いてつくった峠のむこうのバス停で声を掛けた。その日から光造は自分の部屋で女と一緒に暮らした。

裸になった女の乳首は黒かった。「子供、二人おったんよ」女は言った。上が四歳で下が三歳、二人とも男だった。

光造は指で女陰の毛を撫ぜた。くるくると指先に巻きつけても剛いためにすぐ元の縮れの少ない毛にもどった。

光造の裸の胸に口をつけていた女が顔をあげ、光造を見て濡れた唇で、「しゃぶをやってみたことある？」と言った。光造が花卉のように開いた女陰を指の背でゆっくりさすり始めて快感を抱くのか白い歯のもれる笑をうかべ、「そのあたりに打ったら効くて」

「しゃぶか？」

光造は言った。しゃぶと呼ばれる覚醒剤を打っている夫婦は光造のアパートのすぐそばにいた。やせて頬骨の浮き出た顔の四十男は、しゃぶを射ちすぎて幻聴を聴いていたし、その女房は、男には不つり合いな若い眼の澄んだ美人だがこれもしゃぶの為、何をそんなに大きな声を出す事があるのか、夜半、よく金切り声で叫んだ。それは怒りが胸の中に溜りすぎてもちこたえられなくなってしまうすっかり吐き出そうとする声に人の耳には聴えた。いつも長く尾を引いていた。光造には馴れたものだったが、赤い髪の女は驚いて光造を揺り起こしさえした。しゃぶの為に夜半になると騒ぎ立てるのだと光造が説明して、女は納得した。

「打ったことあるんかい？」

とその納得のしよを光造は訊いた。若い男と仲良くなってシャブで中毒になり入水自殺してしまつた女友達を知っている、と言つた。海に呑み込まれて苦しかったのか、それとも体中いたるところに針痕のあつたシャブの快樂のただ中だったのか、水から引きあげられた死体の足の指は力いっぱい反つていた。「こんなにしてな」と女は足の指の形を手で真似てみせた。女の手の指から水がしたたつてゐるようになみえた。

女は赤い舌で光造の豆粒ほどの乳首を齧つてゐる。光造は指の背でゆっくりこすつてゐる女陰がいまそんなふうになく充血してゐるだらうと思つた。ひたとひだの間が分泌したしよう液に似たもので濡れてゐる。女は手を光造の下腹に置いて、光造をじらして性器の辺りを指で撫ぜる。鼻先をこする女の髪が香油とも血のすえたものともつかぬにおいを放つてゐるのを光造はかいだ。女が蒲団を足ではねのけて体を折り曲げ、光造の指をその中心に導こうとする。女は眼を閉じてゐた。

アパートの雨樋を伝う水かさが増したらしくトクトクと音を立てはじめた。

女が部屋に来て四日目に光造は、なるたけ人目を避ける為に外に出るなと言って仕事に出かけた。光造の勤める建設会社の事務所は市内の真中を流れる掘り割りにかかった橋のそばにあった。

雨は細い霧と見まがうほどだったがまだ降り続いていた。事務所に顔を出して、ダンプカーの配車が決まるまで齢がさして違わない孝男を連れ出して喫茶店に出かけた。光造は部屋に転がり込んで来た髪の赤い女の事を言いたかったが極力話をそらして、降り続いた雨で川沿いの国道が滑りやすくなっていると聞いた。その国道で昨日の朝二件続けて事故があったのをみたと孝男は言った。一件は山際の側溝に左半分の車輪を落とし動きがなくなっていた。あと一件は山肌に横転してぶつかったのがガラスというガラスがめちやくちやに割れ、ガソリンさえ漏れ出していた。川からの風が吹いていたおかげで揮発したガソリンは飛ばされて火は吹かなかった。

孝男は「運転した奴がそのすぐそばの草のところに坐って、煙草を吸っとるんや」と呆れ顔で言い、火が点いたらどうするんだと怒鳴ってやったと言った。ガソリンと土埃でまみれた運転手は片一方だけ靴をはき、怒鳴り声にやっとなげいて手をあげ、跛を引きながら歩いて来て平然とした顔で電話のあるところまで乗せてくれと言った。孝男は助手席に乗せて、酒のにおい

のする運転手はポケットから煙草をとりだし口に啞えて、ダンプカーのライターで断りもしないで火をつけた。

喫茶店の窓からみえる梅の花はすっかり花卉が落ちていた。

光造も事故はよく見かけた。いや、川沿いに山に入って行く国道や、海沿いの道を毎日車で走らせていると、リュックサックを背負った学生や女学生に乗せてくれとよく頼まれた。事務所規則では会社の者以外は乗せてはいけない事になっていたが、五人ほど居る運転手はそんな事は守らずその時の気分で乗せたり乗せなかつたりした。

この春先までは駅二つむこうに出来る港のコンクリ打ちに使う為に、川砂利をまっすぐ生コン工場に運び込んでいた。その生コン工場も光造の勤める建設会社のものだが、光造らの事務所は春から新規に外注ものを取ることで独立採算制を敷いた。その事務所はダンプカー、ショベルカー、ブルドーザーのリース専用事務所に変わっているようでもあった。それが五人はどいる運転手の不満の種だった。確かに五人の運転手らは、大型免許だけではなく大型けん引も大型特殊免許もそれぞれ持っていて、運転する者も器材もない小さな組のどんな要請にも応えられるようにチームが組まれていた。事務所長は忍者部隊だとその五人の運転手を言った。土方がコッコツと穴を掘りコンクリをスコップひとつで練り上げる時代は終った。土方を五人

使つて三日間でやる仕事の量とシヨベルカー一台を三時間か四時間動かして出来る量は同じだつた。ツルハンもスコップも土方仕事には必要ではなく、シヨベルカーやブルドーザーで掘り上げたところを図面通り修整する事だけでよかつた。ツルハンをふりあげてふりおろす代りに、ハンドルを操作すればよいのだつた。事務所長はそんな何でも出来る忍者らを抱え器材を取りそろえているのは、建設会社に資本があるからだと言つたが、運転手らは、それぞれダンブカーに気楽に乗っているのが一等よいと言ひ、事務所から派遣されて、土方の組に出かけてシヨベルカーやブルドーザーを運転するのをいやがつた。

光造が注文のあつた組にブルドーザーを運び、ブルドーザーが土を掘り起こすのを感じたように見ている若い土方に、「誰でもこんなものすぐ出来ることじゃ」と一度機械の操作を教えた事があつた。土方は簡単に覚えたが、事務所長からは、機械だけのリースと運転手付き機械のリースの違いを光造はじゅんじゅんと説かれてから、叱られた。運転手付機械のリースは、市内に大小とり混ぜて五十ほどある土建請負業を非効率から救い出して合理化、近代化を促進することにもなる。運転手の光造には、経営の合理化や近代化など知つた事ではないと事務所長の話をきき流した。

孝男が配車の様子を訊きに行つてくると席を立ち、しばらくして笑を浮かべながらもどつて

来て、「配車ゼロ」と言った。席に着いて読みかけのスポーツ新聞を持ち、「なにが大資本じゃ。土方休みじゃったらおれらも休み」と言う。光造は孝男の笑で一本の線のようになった眼を見て、細い雨の降っているアパートにいる髪の毛の赤い女を思い出した。下腹に火が点くような気がし、光造は窓に映った自分の顔を見ながら、女の舌が、いつまでもいつまでもくたびれて充血すると痛みを持ってくる性器を包みこすっているのを思い出した。そんなに何度も何度もやって痛くないのかと女を自分の体の上に引きあげ、女陰にまだ柔かいままの性器をおし当てながら光造が訊くと、光造の眼を見て唇についた唾液を自分の舌でなめて声を出さずに痛いと言をうかべた。

手を添えないと柔かいままの光造の性器は女の濡れた痛みを持った女陰の中に入って行かない。光造の裸の胸に自分の胸を重ねたまま腰をもち上げ、折れ曲がってしまう柔かい性器の先が自分の女陰に当るように女は体をねじる。

「こんなに何回も何回も亭主とやっとなるんかい？」

光造が訊くと、うんと鼻で返事をし、その返事の仕様に煽られてまた固まり始めた性器をやっと中に入れて、「何回も、何回も」と女は言った。女の舌は精液の味がする気がし、女は光造に「あんたもそんな味するよ」と言った。鼻腔にクラッカーの粉が入ってにおいを立ててい